

襄邑道中

陳与義

飛花兩岸船を照らして紅なり

百里の榆堤半日の風

臥して看る満天雲動かざるを

知らず雲と我と俱東するかと

【作者】陳与義(一〇九〇〜一一三八年)中国、宋(そう)代の詩人。字(あざな)は去非(きよひ)。号(あだ)は簡齋(かんさい)。洛陽(らくよう)(河南省)の人。

「墨梅」の詩が徽宗(きそう)に賞されて詩名(しな)があがった。三十七歳のときに国都(こくと)の陥落(かんらく)にあつて各地(こくち)を放浪(はうらう)、杭州(こうしゅう)にいた高宗(こうそう)に招かれて参知政事(さんちせいじ)(副宰相)になつた。平生(へいぜい)から杜甫(とほ)を慕(こ)い、戦乱(せんらん)下の放浪(はうらう)の体験(たいけん)がいつそう杜甫(とほ)への親近(しんじん)を増(ぞう)したと自ら述(のたま)べている。素直(すぢ)な叙情(じょじやう)、叙景(じょけい)の詩(うた)は唐詩(たうし)に似た平明(へいめい)さがあり、感情(かんじやう)を新鮮(しんせん)な感覚(くわかく)でとらえた景物(けいぶつ)に移入(いり)する叙情(じょじやう)は、宋(そう)の中期(ちゆうき)における唐詩風(たうしふう)なものへの回帰(かいき)を示(し)している。著(あ)に『簡齋詩集』三十卷(さんじししゅう)がある。

【語釈】\*襄邑:現在の河南省にあった地名。 \*榆堤:榆の木が立ち並んでいる川の堤防、の意。

【通釈】川の兩岸(くわのりょうがん)に咲(さ)く榆(い)の花(はな)びらが飛(と)び交(まじ)り、私(わたし)の乗(の)っている船(ふね)をも赤(あか)く染(ぞ)めるほどだ。風邪(かぜ)に吹(ふ)かれつつ、およそ百里(ひゃくり)も続(つ)く堤防(ていぼう)に咲(さ)く榆(い)の並木(なみき)の中(なか)を船(ふね)は半日(はんじち)もかか(か)つてゆ(ゆ)っくり進(すす)んでいく。船(ふね)に仰(おほ)向け(むか)ひになつて、ぼんやりと空(そら)の雲(うみ)をみていると、雲(うみ)が全(ぜん)く動(うご)いていないことに気(き)付(つ)いた。なんと、雲(うみ)もこの船中(ふねなか)の私(わたし)と一(いっ)緒(じゆ)に、同(どう)じスピードで東(とう)に進(すす)んでいたのだつた。